『比較民俗研究』17、2000／3

# ベトナム鏡のおもしろさ

末成　道男※

比較民俗学と人類学のちがいがよくわからない。比較というからには民俗学を自文化一国の研究に限定するのではなく，他文化に目を向けることになる。そこで，異文化研究を旨とする人類学との差異が問題になる。それには軸足を自文化に置くという説明がすっきりしているようだが，人類学だって調査者は自文化から脱け出しているわけではないし，自文化から脱けきってしまったら，その瞬間から人類学者としての調査はできなくなっているだろう。ただ，人類学者の場合，相手の文化に自文化の要素が全く見いだせなくても痛痒は感じないが，比較民俗学では都合がわるいのではなかろうか。日本でアフリカを研究している民俗学者を聞いたことがないのは，この辺に関係があるのだろう。もしそうだとすれば，習俗のような意識化され形象のはっきりしたものの中に自文化を見いだしたいというこだわりが有るのかも知れない。この点，これから述べるベトナム鏡は日本を含む東アジアを対象としているので，人類学的調査中に思いついたものだが，比較民俗学でも参考になるのではないかと思われる。

ベトナムと聞くと，日本ではふつう東南アジアを連想するものではなかろうか。水牛に乗った少年と菅笠をかぶった娘さん，かつてベトコン兵士が隠れていた緑の密林とナパーム弾に焼けただれた平野，えらく暑い気候と市内の瀟洒なフランス風コロニアル建築といったのが平均的イメージかも知れない。たしかにハノイの夏は，四月ごろから始まり秋の気配は十月にならないと感じられないが，冬ともなると暖房が無いこともあって厚手のセーターやオーバーが欲しくなったり，水田の広がる田園風景や木魚の音に読経の声，みそに豆腐に白餅といった風物はむしろ日本を想わせる。こうした即物的な類似だけでなく，儒教の浸透ぶりは 日本をしのぎ韓国に肩を並べ，情緒的な反応は中国人や韓国人よりもはるかに日本人的である。日本の焼け 跡世代のおじさんたちが，一度足を踏み入れるとベトナム中毒になるのも無理はないと思わせるところがある。

ベトナムの面白いところは，こうした類似が，実は日本だけでなく，韓国，中国，東南アジア諸国，欧米，ロシア等それぞれの文化に対し異なった相貌を見せることである。例えば，ある韓国の人類学者は，ベト ナムの王族の後裔と言う伝承をもつ韓国人がルーツ探しに来て最初は歓迎されながらも，その想いの熱さと，地元の遠祖への関心の薄さとのすれ違いの過程に，両文化の異同を見出している。漢族の同僚は，もと華人系コミュニティに入り，会館が有ったり，族譜が使われていることに親近感を覚えるが，族譜の書き方が中国式の世代原理とずれているのにすぐ

※東洋大学社会学部教授

気づく。情義にからめた不透明な経費の請求にはいくら親しくても冷静に指摘し支払わないのに対し，ベトナム側も割り切って応じている。日本人研究者は，上記のような風景や「情感」中心の人間関係を日本の義理人情に置き換えて親近感を持ち，ベトナム側の要求を日本流に受け取り律儀に守ろうとして身動きがとれなくなってしまう場合もままある。

以上それぞれの研究者が自文化との類似点に引きつけて興味を引き出せるフィールドとしての側面を強調したが，これだけベトナム社会が多面的であるということは，同時にどの研究者も異質性をたっぷりと味わえることを意味する。ただし，そのためには腰を落としてじっくりと構えなければなるまい。少なくとも，ある程度のベトナム語の理解力，表面上の類似の奥に有る異質性を含む語りを引き出す弾力的で機敏な設問と答えのうちに相手の機微にふれ真意を判断できる感覚が要請される。アンケートはもちろん，ステレオタイプ化した質問項目表は役に立たない。このレベルまで関心を共有することが出来れば，この鏡が役立つのは人類学か比較民俗学かといった詮索はもはや不要であろう。もしかすると，ベトナムは東アジアの比較民俗学と人類学の共通のあるいは対決の場になりうるのかも知れない。それも，日本本土だけでなく，沖縄，韓国，中国さらに欧米を含め，現地ベトナムの研究者や地元の人々と入り乱れた取り組みこそ望ましい。

参考文献

Suenari, Michio 1996 Vietnam as a Polyhedral Mirror for Anthropologists and Historians. *Proceedings for the Conference on "Aia in the 21st Century: Toward a New Framework of Asian Studies."* Institute of Orintal Culture, University of Tokyo. Pp.38-47.

新刊紹介

## 末成道男著
## 『ベトナムの祖先祭祀－潮曲の社会生活－』

本書はベトナムのハノイ市域，紅河デルタ上の一村，潮曲の生のデータとそこから導かれた考察からなるモノグラフである。経済発展の著しいベトナム農村の変貌前の状況を具体的に提示し，漢文化の影響圏の中で，主に家族・親族，村制，人生儀礼との関係から祖先祭祀を描出する。祖先祭祀儀礼そのものは続編の宗教生活編で論じられるという。構成は序，1概況，2むらから見た歴史，3むらの組織，4むらの年中行事，5むらの家族，6むらにおける親族，7人生儀礼，結語となっている。いずれの章においても中国・韓国・日本と比較し，東アジアにおけるベトナム社会の特質に言及している。日本の年齢階梯村落との比較には特に一節を設けている。また，本書にはCD-ROMが，ビデオ映像の提示と民族誌的分析との結合，基礎資料の公開，マルティメディアとして文化を描く試み，を意図してつけられている。民族誌研究の再考がせまられる中で，意欲的な試みに満ちた一書である。

（佐野賢治）

A5版　446頁　CD-ROM付

東京大学東洋文化研究所　1998年3月刊